

農家悲痛「濁水で田植え」

霧島・土砂流出 説明会で訴え

霧島市霧島永水の太陽光発電施設の建設現場から大量の土砂が流出した問題で、施工業者らによる復旧工事の説明会が1日夜、地元の公民館であった。調整池にたまった土砂の撤去が遅れており、農業用水路につながる手箆川の水は濁ったまま。出席した農家は「もう待てない。濁った水で田植えをせざるを得ない」と、苦渋の選択を迫られている現状を訴えた。

説明会には、施工した東京エネシス（本社・東京都）や市、県の担当者が出席し、地元の農家ら約50人が集まった。住民と土地所有者との覚書では、「1時間雨量126ミ、12時間雨量406ミに耐える防災施設」と記載されている。だが、5月10日は1時間雨量が最大で36ミ、24時間で133ミしか降っていないにもかかわらず、土砂が流出。容量が大きいA調整池とD調整池は満水状態となって機能不全に陥り、濁った水が手箆川に流れ込んでいる。

東京エネシスによると、土砂流出後、調整池の機能回復のために土砂の撤去作業を続けてきたが、A調整池は推定堆積量の4割、D調整池は1割程度しか撤去できていないという。説明会では農家から、濁りがなくならない手箆川の現状を嘆く声が相次いだ。出席した男性は「以前は嵐崩れの時だけしか、濁り水は出なかった。今は雨が少し降るだけで濁る。こんな水では田植えできない」と訴えた。エネシスの関係者は「迷惑をかけて申し訳ない。大変なことをし

てしまった」と頭を下げた。県の担当者も「県民の生活と安全を守るのが県。職務怠慢ではないか」と出席者から詰め寄られ、「現地は月に1回視察してきた。市と連携して指導していきたい」などと説明した。一部の農家は、田植えの時期を延ばし、復旧工事が終わるのを待ってきた。濁った水を引き上げば土砂が水田に沈殿し、コメの収量や品質に影響が出かねないためだ。しかし、工事が長引き、清流も戻らず、育ちすぎた苗が田植えの機械

に入らなくなりつつある。腐り始めた苗もあるという。

米づくりを休めば、田がやせ、雑草が生え、田が荒れるという。「濁り水でも水を入れて田植えをせざるを得ない。私たちには死活問題だ」と、農家からは悲痛な声が上がっていた。

（大久保忠夫）

県議会で県側

「対策が不十分」

代表質問

県議会は3日、代表質問があり、向井尊磨議員（県民連合）が霧島市の太陽光発電施設での土砂流出問題を取り上げ、発生原因などについて質問した。

県環境林務部の東條広光部長は、発生後に事業者から話を聞き、現地調査をしたと説明。土砂の流出を防ぐために法面に芝を張る作業を一部でしてはなかったり、置いておくべき土嚢が不足していたりしたことを挙げて、「雨水対策が不十分だった」と述べた。